

前方後方墳の成立とその性格

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学史学地理学会 公開日: 2009-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 初重 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1621

前方後方墳の成立とその性格

大塚 初重

一、はしがき

階級社会發展の一指標である古墳は今日、全国で万をもつて数えうる程の存在を示している。そして最も普遍的な形には円墳があり、天皇陵として多く採用された前方後円墳は形態がわが国独自の制を示すだけでなく、中央及び地方の支配階級によつても踏襲された。従つて、その地の支配者の消長とわが古代国家の権力構造の一端を示す点において重要視されてきた。そしてこれらの古墳は、その築造年代の前後によつて規模・外形の上に変化を持つことも既に明白な事実として容認せられている。一方、基本的な円墳とまた著しい特性を持つ前方後円墳の以外に、方墳・双方中円墳・帆立貝形古墳・前方後方墳なども存在する。この中、帆立貝形古墳は前方後円墳の初現的形態をとるが、円墳につくり出しが付設されたものであろう。双方中円墳は奈良県橿山古墳と香川

県猫塚古墳などの例に見出されるように、前方後円墳の後円部に新たに主軸と併行して方形壇状部を設けた形状を呈する。以上二形式の古墳は早くから調査が行なわれた關係から學界においてもその存在が認められ、周知のこととなつてゐる。

これに対して方墳は、用明・推古両天皇陵などに認められるがその調査研究は著しくおくれているのが現状である。わが国における方墳研究の歴史的發展は、大正年間における宮崎県西都原古墳群の調査迄は殆ど空白となつてゐる。しかし其後浜田耕作博士の業績を基盤とされて研究を進めた梅原末治博士は、奈良県石舞台古墳の調査を楔機として全国に分布する三十六基の方墳を集成されたのであつた。^{註1}この方墳数は近年迄學界の支持をうけていたが、戦後各地で古墳の調査研究が進むに従つて、梅原博士の集成数に大量の増補をすべきことが明らかになつた。この事實は絶えず前進する學問の性質から云つ

てまた当然のことでもある。そして方墳の研究が大きな進歩を示さなかつたとはいへ、本稿の主題とする前方後方墳の研究段階に比すればなおより高き水準に到達していたことは、言うまでもない。

前方後方墳は前方後円墳の主丘が方形をなす形であり、方墳に前方部が付設したものと云いなおすこともできる。

今日迄学界においてその存在が承認されていた僅かな例は、島根県史による大庭二子塚古墳、群馬県八幡山古墳と栃木県上・下侍塚古墳など数例にすぎない。

戦後日本考古学協会による各地古墳の分布調査が推進されるようになって、はからずも本形式墳が島根県下に九基存在することが島根大学山本清助教授等によつて確認されるに至つた。この九基の中の一基は既に梅原博士によつて発掘調査が行なわれ、興味ある資料を得られたという。島根県下の前方後方墳の実態が明確にせられたのは昭和二十六年であつたが、昭和二十八年に至つて二基の前方後方墳の発掘調査が行なわれた。即ち栃木県及び茨城県下におけるものであり、前者は三木文雄氏により後者は後藤守一教授によつて調査された。その他奈良県では末永雅雄博士により下池山古墳が確認され、次第に各地にその類例を増すようになった。極めて特異な形

状を有する前方後方墳はその数も僅かであるという在来の考え方に反し、二十数基を認めるまでになつた。

これらの中、島根県下の前方後方墳九基は、同地方における前方後円墳の存在数と等しくかなり顕著な古墳文化の特性を表現しているといえよう。

島根県下とはいえ出雲地方にのみ認められる前方後方墳については、山本氏の基礎的な調査研究が続けられており、その上、同地方の特殊性とも考え得る方墳の研究と相まつて、古代出雲の解明に新しい一步を築かれたと云つてよい。同氏は「出雲では稍々大形の古墳について云うと円墳と方墳は略々同数であり、前方後円墳と前方後方墳とは略々同数である。而も方墳や前方後方墳には円墳や前方後円墳よりも却つて古式のを多く含んでいる様にさえ見える。即ち出雲では方形の系統のものが早くからあらわれ爾後かなり多く作られていることは一つの注意すべき地方色と云うべきであらう」という重要な提言をなされている。

出雲地方において明確となつてきた前方後方墳は、その他の地方、例えば栃木県上・下侍塚古墳の如く史蹟の指定をうけた著名な古墳でさえ余りはつきりしない。しかし侍塚古墳は徳川光圀の援助によつて発掘が行なわれたという点で僅かに出土品に対して考古学的な研究結果

に接することができるのである。^{註4} いわんやその他の地方に存在する前方後方墳については、所在が知られるに過ぎないという現状である。若し数少ない前方後方墳に関する論証を挙げようとするならば、群馬県八幡山古墳に對する佐藤錠太郎氏の一文を描いて外にはないのではなからうか。^{註5}

筆者は昭和二十八年に後藤守一教授がなされた茨城県新治郡柿岡町・丸山古墳^{註6}調査に参加し、同古墳が稀に見る前方後方の形態をとる点に疑問を持ち、爾来本形式墳の研究に携わることとなつたのである。折しも同じ二十八年春には三木文雄氏が栃木県那須郡小川町において前方後方墳の發掘を実施され、夔鳳鏡・鉄製工具を含むかなりの遺物の出土を見た。^{註7} しかも同古墳の内部主体が異なる粘土棺構造として茨城県・丸山古墳例と全く同一のものであつた。この二例の發掘調査は、前方後方墳研究上極めて重要な資料となるが、それにもまして正確な墳形を知ることが第一歩であらうと考えた。

前方後方墳の実態が殆ど知られていない段階にあつては何よりも基礎的な資料の検討が必要である。本稿は、筆者が蒐集し得た資料によつて、前方後方墳の分布と形式から成立の年代を捉え、それが如何なる過程において出現したかを考えようとするものである。しかしこのよ

うな研究は、各地域における地域古墳群の徹底的な研究がまず土台とならなければならぬが、そうした基礎的なまた重要な研究段階の通過に本稿は欠けているうらみがある。学問の進展のために前方後方墳の実態を少しでも明らかにしておくことは有意義なことであらうと考えた点に、執筆の意図があることをおことわりしておきたい。

二、前方後方墳の分布とその実態

出雲地方において九基という集中的な分布を示す前方後方墳は、古墳文化の中心地であり指導的役割をもつた畿内地方に三例が存在し、未確認の例として一例が保留される。これら三例の前方後方墳は何れも奈良県下に存在し、その代表的な例は北葛城郡馬見村新山古墳と山辺郡朝和村下池山古墳である。新山古墳は梅原博士の優れた報告^{註8}によつてその内容は明らかにまつている。下池山古墳は末永博士の紹介^{註9}があり、他の一例は博士が近年高市郡新沢村附近において確認された古墳である。^{註10} 未確認一例は天理市近くに所在する西山古墳^{註11}であるが、主丘の裾が方形を呈し墳頂部は円形であるところから上四下方の形態を持つと云われているが、前方後方墳と断定するまでに至つていない。奈良県下における三例の前方後

方墳はその数と存在のしかたに出雲地方のそれとはかなり異つたものがあり、後者が著しい特性を持つてゐることをうなずかせる。

古墳が畿内地方を中核とした大和朝廷の政治権力の伸長を物語るものであることは既に説かれてゐるが、量において出雲地方に劣る本形式墳は、静岡・群馬・千葉・栃木・茨城・福島 of 六県に見出され、東日本全体として分布に稍著しさを示してゐる。そして更に中部地方石川県(能登)に一例の存在を知るのである。

関東地方では東京都・埼玉県を除く各県に存在するが最も著しい分布は栃木県の例であらう。上・下侍塚古墳・大塚古墳、八幡塚古墳の四基が存在する。これら四基の前方後方墳は一古墳群に包括される。

茨城県下の前方後方墳には二基が知られ、既述した新治郡八郷町(旧柿岡町)柿岡の丸山古墳と行方郡玉造町沖州所在古墳である。丸山古墳は昭和二十八年十一月に発掘調査され、沖州の一古墳は昭和三十年四月の発見にかゝる。^{註12}

群馬県八幡山古墳は現在史蹟指定をうけ、わが国前方後方墳中最大の規模を有する。千葉県成田市外・舟塚古墳は昭和三十年十二月に発見したが空濠と外堤を持ち段築を有してゐる。群馬・千葉県は各一基宛の存在である

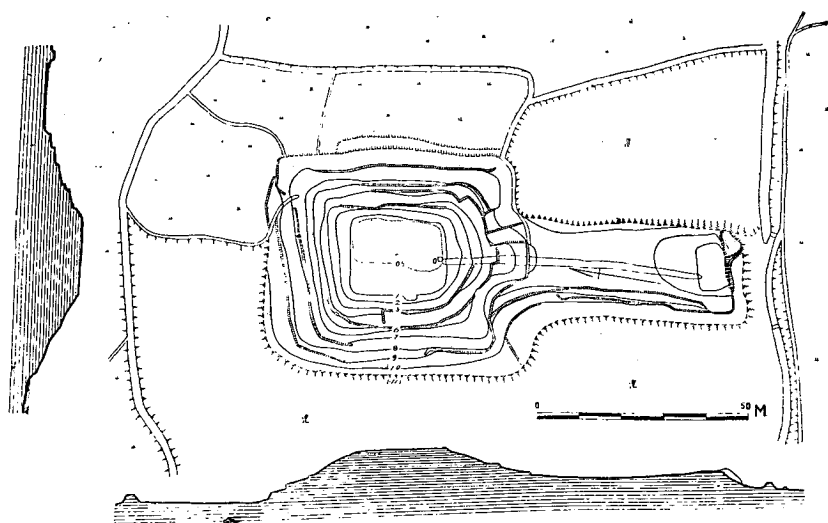
が、東北地方福島県にも一例を見る。福島県相馬郡原ノ町・渋佐十一号古墳は福島県下最大の古墳と云われ、前方後方墳最北の例として重要な存在である。以上分布の大略を述べたが、出雲地方九基、畿内地方三基、東日本各地に十基、能登地方一基、そして不確実な一例を加えると二十四基の前方後方墳が存在する。東日本各地の十基はその分布範囲が広く出雲地方の分布密度には及ばない。これら二十四基の前方後方墳は、墳形・規模その他において異つた姿を持ち、古墳の形式・年代を考えるには是非ともその実態を知ることが必要である。

(一) 畿内地方の前方後方墳

確実な三例中、末永博士が調査された高市郡新沢古墳群の一例は、博士の研究が進行中なので近い将来の発表を待ち、こゝでは新沢古墳群が低い丘陵上に占地し、小形円墳を主とした古墳群であり、総数一九二基中に方墳・前方後円墳及び前方後方墳を含むことを記すにとゞめよう。^{註13}

下池山古墳 奈良県山辺郡朝和村成願寺に存在する。

同地は大和盆地の東を限る山塊の西側斜面、山麓の緩傾斜地である。大和盆地周辺には年代の遡る古墳が多いが、下池山古墳は南面する手白香皇女陵とあたかも併行する位置にあり、附近の古墳を合せて朝和古墳群を形成



第一図 奈良県下池山古墳実測図

している。本古墳は畿内地方の前方後方墳の代表的な例であるから、他地方の同形式墳を研究するについても是非とも明らかにしなければならないと考え、昭和二十九年十一月に学友李進熙君の助力を得て実測調査を行った。(第一図)

調査結果によると古墳は現状で全長一一・五米、後方部一辺の長さ約五・五米、高さ一一米、前方部長約六〇米、前端幅二・五米、高さ約六米ほど南面している。墳丘の約七〇％は耕作地となり各所に小石垣を築いている。後方部墳頂は二〇米平方の平坦部となり南寄りに小祠を祀る。石垣構築の特に顕著な部分は主丘東側であるが、北及び西側では直線状をなす等高線が得られたこと第一図の如くである。本古墳の最も著しい形態上の特徴は前方部である。前端が崖状となり僅かながら削られたことを物語るが、現地状況からはなお南への延長は考え難いようである。更に前方部が拡大していない点も、東西両裾が若干崩れているので、僅かに拡がるのが許容し得るかも知れない。しかも前方部西側裾部に近い地点で主丘頂部に設定した基点より一〇・五米のレベルに、葦石の連続が認められたことから判断すると、前方部のひらきほたいしたものではなかつたと云つてよいであろう。墳丘各所に築いた石垣はすべて葦石であつたと推定

される。

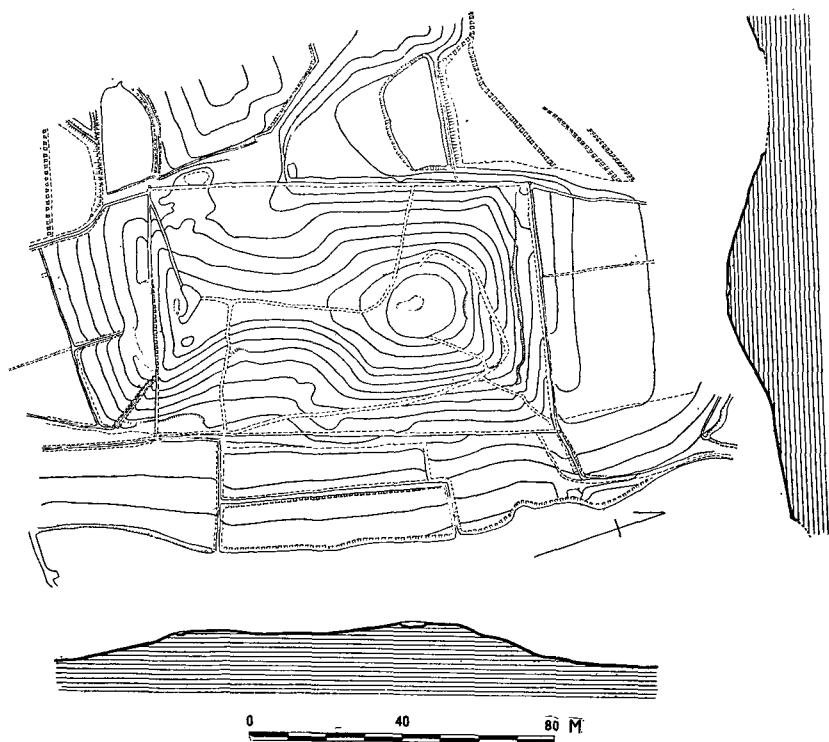
また葦石が認められた附近には石垣が少ないという現象は、石垣は葦石を以つて築いたとする考え方の妥当性を裏書きする。古墳は東から西へ緩く傾斜する山麓に占地しているため、周濠のレベルが同一でなかつたことがわかる。即ち後方部北東隅下の水田面は墳頂から九・八五米下方のレベルを示し、古墳東側の池の水面は一〇・一米である。更に後世の著しい変改があつたことを考慮に入れても、墳丘西側裾のレベルは墳頂下一一米余であつたと考えられる。(第一図後方部立面参照)古墳東側をへだたる二〇米ノ四〇米の水田面は、墳頂下八・九米及び九・一米を示していたから池と墳丘裾に接する水田面より約一米高いことになる。以上の如き細部の状況は東西にわたる傾斜地形に順応せずに、南面して築造した場合に当然採用するに至つた技術的必然性からくることを示しているのであろう。また後方部から北方三〇米に土堤が存在しており、これがかつての濠の幅を暗示するとは云えないだろうか。墳丘西方はかなり広い池となつているので、若し濠の存在が認めうるとするなら、今迄に述べた東側の所見が当然参考にされるべきものと思ふ。外部設備として葦石が存在することは述べたが埴輪円筒列があつたか否か不明である。前方後方墳とする墳

形の最良の確証は、埴輪円筒列と葦石の存在によつて得ることであるが、残念ながら今の自分にはなし得ない。しかし筆者の知り得た資料では前方後円墳が前方後方墳に変形してしまつた例は一つもなく、正確な測量調査の結果から十分に墳形の復原ができると考えている。下池山古墳の年代を考える場合に、最も確実なきめ手となる内部主体・出土遺物はまず不明というべきだろう。それほどあいまいさなのである。筆者らが地元の人達から聞いたことでは、主体は細長く石を積んだ形で朱と勾玉などが出土したという。恐らく竪穴式石室であつたのではないかと思う。そして発掘は三十年程前に天理市某が行つたらしいということであつた。以上が下池山古墳の内容であるが、後方部と前方部の差が著しいこと及び後方部が整美な方形プランを呈することは、前方後方墳の墳形変化をトレースする上に重要な特徴となるであらう。

新山古墳 奈良県北葛城郡馬見村大塚に存在する。この地は奈良盆地の西部通称馬見山と呼ぶ高さ百米に満たない丘陵の東側にあり、丘陵中央部の佐味田宝塚古墳を初めとして池上山・乙女山・石塚山・巢山・新木山・築山などの諸墳が丘陵東麓に並び馬見古墳群を形成する。新山古墳はこの馬見古墳群の東南部にあり、丘陵方向と直

角に高田川と併行し、南面して営まれている。

新山古墳は明治十八年に多量の副葬品が発見せられ、特に三四面にのぼる鏡の出土により佐味田宝塚古墳とともに、著名なこととなつてゐる。同古墳の調査研究を担当された梅原博士はこれを前方後円墳とせられ、今日に及んでいる。しかし新山古墳が前方後円墳であるとするよりは、前方後方墳とする可能性の強い資料が発見せられた。即ち、昭和二十八年秋、学友西川宏君が卒論執筆中に陵墓参考地測量図で奈良県北葛城郡馬見村大塚という地名の前方後方墳を知つたのである。早速後藤教授に連絡の結果、これが図らずも新山古墳の地名と一致することになり資料の検討を開始したのである。第二図は宮内庁諸陵部所蔵の新山古墳実測図であり、大正十五年帝室林野局が測量したものである。梅原博士の高著「佐味田新山古墳研究」の刊行が大正十年で、本古墳調査を大正九年に行なわれた



第二図 奈良県新山古墳実測図

と考えられるので其の間、六年の経過を有する。しかも博士は報告書に新山古墳の略測図を掲載されているので比較に便である。

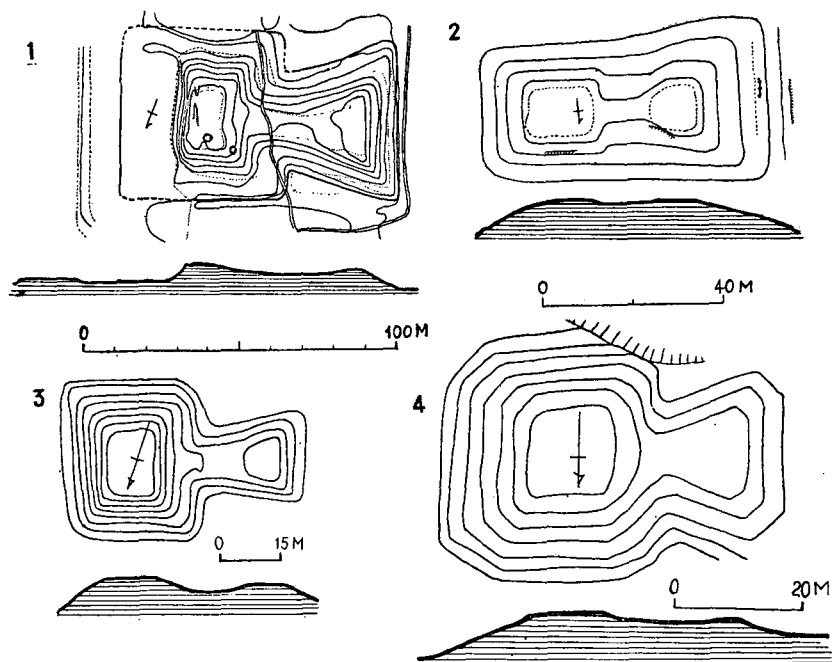
博士によると本古墳は「池を繞らせる稍広き台地の中央に、前後の長径約四百二十尺、前方部の幅二百二十尺、後円部二百尺内外にして、この部の高さ約三十尺の封土を築けるもの^{註14}」という法量を示し、段築はなく、前方部の一部が宮内省の陵域指定にならなかつた理由から、耕作地として若干変形していること、更には後円部頂上と前方部上に發掘痕があることを指摘されている。博士作製の略測図は後円部が僅かに方形化し、北及び西側の等高線は正に直線状に近く後方部とする可能性もあるのだが、博士は此処を円形に点線で復原されている。第二図が示す古墳の方向は、新山古墳略測図のそれと一致する。そして周囲を繞る池の様子も合致する。第二図に基づき法量は長軸長約一二七米、後方部幅六四米、同高さ一〇米、前方部幅約六〇米、高さ八米となり博士算定の法量と略々合致するのである。その上前後両丘の發掘痕の位置と規模も同定するからこの古墳が新山古墳であることも明白であらう。問題は前方後円墳か或いは後方墳かの何れかにあるが、後方部の稜が稍乱れているとはいえ、墳丘裾から頂部への等高線が東、北、西側いず

れにおいても直線状をなすつまり方形化を呈するということは、前方後円墳の変形したものとはなし難いのである。墳丘全面にかつて大変形を及ぼした事実が存在すればまた問題は別であるが、墳丘を突見してもそのような変形が加えられたとは考え難い。従つて本古墳を前方後円墳とするよりも前方後方墳とすべきであると思う。そしてこのことを実証によつて示さねばならないとするならば、陵墓參考地とはいえ、幸いに残る埴輪円筒列の追求を措いて他にないであらう。

新山古墳の内部主体・副葬品については梅原博士の詳細な論攷があるので此処に改めて説く必要は全くない。主体は割石小口積の堅穴式石室の系統に属し、出土遺物には三面の直孤文鏡を含む多数の鏡を初め碧玉製腕飾類など前期古墳の様相を残すが、金銅製帶金具及び刀装具などの存在により中期古墳とすべきであらう。

畿内地方における二基の前方後方墳は大和盆地の東西に朝和古墳群と馬見古墳群の一構成墳として存在する。両者の規模は略々等しいと云えるし、どちらの古墳群も前期から中期に及ぶ点で類似している。しかしこの両古墳群における前方後方墳のあり方については、なお後論で取扱いたいと思う。

(二) 出雲地方の前方後方墳



第三図 各地の前方後方墳

1. 島根県大庭二子塚古墳
2. 島根県神塚古墳
3. 石川県亀塚古墳（陵墓参考地）
4. 静岡県小鉢子塚古墳

九基に及ぶ本地方の前方後方墳は既に山本清氏によつて十分紹介されている。その最も規模の大きな古墳は八東郡大庭村二子塚古墳とされ、長軸長復原九〇米、主丘幅五四米余、高さ九米、前方部幅五〇米、高さ六・五米、西南西を向く。占地は低い台地上で周濠及び段築を有し、埴輪が存在している。第三図（1）は山本清氏の実測になる図であるが出雲地方最大の古墳といわれている。九基の中、内部主体の判明している四基は、八東郡竹矢村岩船古墳（舟形石棺）、同郡大庭村・御崎山古墳（横穴式石室石棺）・松江市西川津・金崎一号墳（縦穴式石室）、八東郡大庭村・古天神古墳（横穴式石室）である。また墳丘規模は大庭二子塚古墳を最大とし、竹矢村中竹矢古墳（全長二〇米）を最小とする、これら九基の墳形プランは必ずしも同一ではなく、その発展に従いさまざまな変形を遂げている。（第三図2参照）墳丘の形式については後論にゆずるが、出雲地方の古墳文化の著しい特性として三三三基に上る方墳の存在

が指摘せられその中のあるものは、前方後方墳の出現に多少なり先行するという事実は、前方後方墳研究に見逃すことのできぬ事象である。何故なら、古式の様相を持つ方墳―造山古墳が、底辺六〇米、高さ一〇米を示し前期的な堅穴式石室を包蔵している点において、前方後方墳中最も年代の遡ると思われる大庭二子塚古墳の成立を解く上に重要な鍵を提供すると思われるからである。

㊦ 石川県（能登）の前方後方墳

中部地方唯一の例は石川県鹿島郡御祖村小田中にある亀塚古墳である。本例は後藤教授の御教示によるもので未だ実査の機会を持つていない。第三図(3)の亀塚古墳実測図によると、全長は六一米、後方部南北径四一米、東西径三五米、後方部高さ八米余、前方部幅二四米、同高さ四米余を示している。古墳の方向は前方部を西南西に面している。今日この亀塚古墳は陵墓参考地となり樹木が密生しているという。内部主体・出土遺物は不明である。しかし墳形のプランでは、後方部が正方形ではなく、長方形に近い特徴がある。また前方部の高さが主丘の二分の一であり、前方部幅がさして開かぬ点も注意する必要があると思われる。

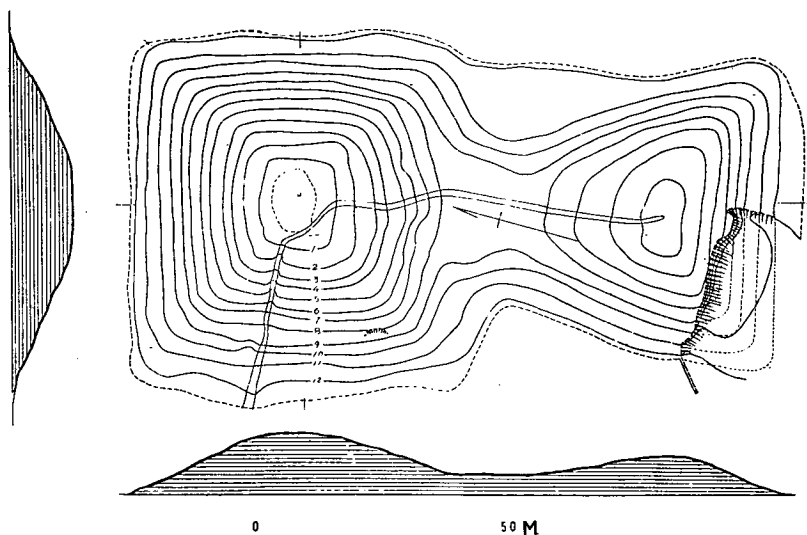
㊧ 東日本各地の前方後方墳

小銚子塚古墳 静岡県磐田郡岩田村寺谷原に存在し寺

谷古墳群に包含される。長軸長四七米、後方部幅三六米高さ七米、前方部高さ三米、前方部幅二四米を示し、西面する。(第三図4後藤教授実測) 後藤教授は本古墳を前方後方スミキリ墳と名付けられたが、最近の調査ではかなり不明瞭となつた如くである。(目下静岡大学内藤晃教授により調査が行なわれている)

舟塚古墳 千葉県下唯一の例である。印旛沼に望む低い台地上に三基の前方後円墳とともに縦列し、九十基に及ぶ小古墳を合して古墳群を形成する。成田市大字山口の山林内に存在するが未だ精査を行つていない。古墳は前方部を北西に向け全長約七〇米を有する。墳丘には段築が明瞭に残り周濠を繞らすが、その外域には前方部側の一部を除き略完存する土堤が走る。この土堤は後方部側が彎曲せず直線状に築かれていたので、周濠プランは矩形であつたと云える。

八幡山古墳 群馬県前橋市外の朝倉古墳群中の代表的古墳である。古墳は旧上川淵村朝倉宇若宮にあり、前橋市方面より南流する広瀬川とその支流に挟まれた低台地上に占地する。台地上には八幡山古墳の上に、天神山古墳^{註16}を初めとして、数基の前方後円墳と多数の円墳が群集している。この古墳群の検討はそれ自身重要な諸問題を蔵しているが此処では触れないことにしたい。



第四図 群馬県八幡山古墳実測図

史蹟・八幡山古墳は前方部を南南東に面し長軸長一三二米、後方部幅七三米、同高さ一二米、前方部幅六五米同高さ八米、くびれ部の幅約三〇米である。(第四図参照) 前方部西端が削り去られている以外に墳形の変化はなく、特に後方部墳丘斜面は築成当時そのままの如き、傾斜の美しさを持ち各所に葎石面が露出している。外部設備の埴輪類及び周濠の有無は明らかでないが、現地の所見ではないとすべきであろう。本古墳は既に発掘に遭い、主体は横穴式石室であつたと云われる^{註17}。また、出土遺物に直刀(群馬大学蔵)の存在を見る。八幡山古墳は現今発見し得た前方後方墳の中では最大の古墳である。しかし既に述べた奈良・下池山古墳、或いは朽木・上侍塚古墳に比し極めて大きいという程のものではない。後方部の整い方、或いは前方部の形態からいって、前方後方墳の最盛期におかれるものであろうか。問題は八幡山古墳の外形・規模の實際を把握するとともに、朝倉古墳群の中で如何なる位置を占め、また推定しうる年代により出現の過程と其後の推移をどのように把握するかにあると思われる。

丸山古墳 茨城県新治郡柿岡町の通称丸山上に南面して占地する。全長約六〇米、後方部幅三〇米、同高さ七米前方部幅二六米、同高さ四米、埴輪・葎石は無く空濠の

面影が一部に残る。極めて簡略化した粘土棺構造が、主軸と併行し北枕に発見された。副葬品に倣製内行花文鏡を初め銅鏃、勾玉、管玉、劍、直刀、刀子があり、遺物のセツトには前期的様相が認められる。しかし個々の副葬品研究の結果は、本古墳を中期に比定することの妥当性を与える。丸山古墳は柿岡古墳群の中で、最初に出現する古墳であり、占地上からも中心的存在である。東日本特に関東地方の前方後方墳は、一古墳群の中で、初現的なまた主導的古墳としてあらわれる傾向がある。この傾向が確かな事実とすれば、同定せられた時代の各地域のあらわれ方を再び取上げる必要に迫られるのである。

(既述の如く本古墳は昭和二十八年十一月〜十二月に発掘し、報告書近刊予定)

沖州古墳 茨城県行方郡玉造町沖州、霞ヶ浦に沿い常磐線石岡より鉾田へ通ずる県道と併行し、小高い丘陵が南北に走る。沖州古墳は丘陵の北端に位置し、後方を広く開けた沖積地に向ける。古墳の方向は丘陵の走向と一致しほぼ南北に近い。末調査のため正確な法量は不明であるが、全長六・七〇米、後方部幅約三〇米、前方部の高さは主丘に比し半分である。後方部の稜と直線をなす斜面は比較的良好に遺存している。この丘陵上には前方後円墳数基の外、小円墳が若干占地し、前方後円墳中には

著名な埴輪窯出土古墳が存在する。これら諸古墳は北方数百米の沖積地に孤立して存在する三昧塚古墳をも含めて沖州古墳群を形成する。この古墳群に対する筆者の検討は殆ど未着手の状況であり、問題の提起にすら至っていない。しかしごく一般的に観察が許されるならば、沖州古墳は本古墳群形成の初期に築造され、その年代の五世紀を下らないであろうということが、墳形・規模・占地・方位諸点の総合から推定できるのである。

上侍塚古墳と下侍塚古墳 那須火山群とその西方山地に発源する那珂川は、那須野原の東北から東の境界を寄切り南下する。この流れは栃木県那須郡湯津上村を通り佐良土において西北から流れる箒川を合わせ小川町をへて烏山へ南流する。この那珂川流域の西側には特に河岸段丘が発達しているが、著しい流路の変化によつて、次第に西方へ後退している。北から南へと連る段丘上には大小の古墳が存在しているが、湯津上村上侍塚を中心とするグループと小川町八幡塚古墳が代表するグループとに二分できる。学友西川宏君はかつてこの古墳群に下野・小川、湯津上地域古墳群という呼称を与え、更に小川支群と湯津上支群の二群に分けて把握した^{註18}。この分け方に賛意を持つ筆者も同君の分類に従いたいと思う。

下侍塚古墳は笠石とも呼ばれているかの那須国造碑か

ら南へ七五〇米にあり、上侍塚古墳は同古墳から更に南方七五〇米の段丘上に存在する。湯津上支群はこの二古墳を中核とし、そして上侍塚古墳を南端に北方へ一・五畧の地域に前方後円墳一基、円墳六基を以つて構成される。

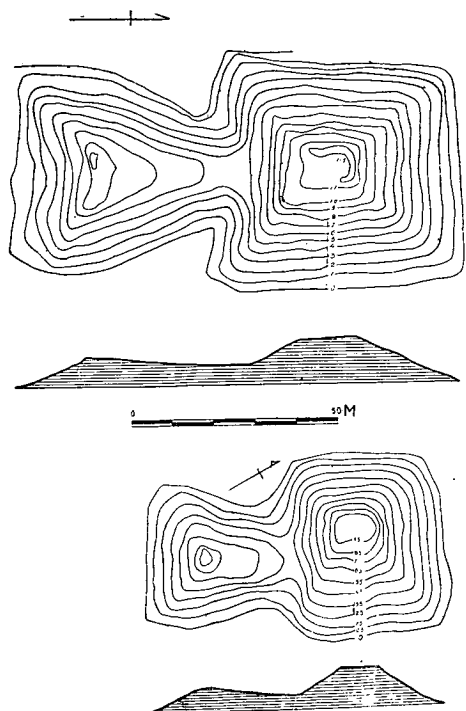
上侍塚古墳 第五図上は前方部を南に面し長軸長一・一・六米、後方部幅六二・三米、同高さ一一・五米、前方部幅五一・七米同高さ七・二米を算し、楕形周濠を繞らす。外部設備には円礫を使用する葺石があり、墳丘斜

面に露出している場所もあつた。そして埴輪円筒片が採集し得た点から、円筒列の存在を認めてよいだろう。後方部墳頂から家形埴輪が、後方部の周濠の外堤から埴輪円筒が出土したと云う。

内部主体は不明であるが、元祿五年二月（一六九二年）に大金重貞が佐々宗淳と共に光圀公の援助の下に、次に述べる下侍塚古墳ともども発掘した。その際に、盤竜鏡（面径一五厘余）・直刀・刀子・鉾・鏃・鏝板・高坏（土師器のように考えられるが詳細不明）などが出土

している点から、若し何等かの主体構造があつたなら出土品の記載と一緒に認められてよかつた筈である。この点に関して三木文雄氏は、後述する小川支群の八幡塚古墳主体部の如き特殊な粘土棺構造であつたがために、何等知見にのぼらなかつたのではあるまいかと示唆されている。ともあれ出土遺物の示すところ横穴式石室出土の後期古墳遺物のそれに属さないものであらう。

第五図 栃木県上侍塚古墳（上）
下侍塚古墳（下）



下侍塚古墳 第五図下は上侍塚の北北西約七五〇米にある下侍塚古墳である。長軸長七六米後方部幅四六・二米、同高

さ九・五米、前方部幅三五・七米、高さ五・七米、前方部を南に向ける。後方部と前方部高さの差は約四米に近く、前方部の發達は著しくない。上侍塚古墳同様楕形周濠を設ける。内部主体は不明であるが、出土遺物には面径約一〇厘の振文鏡、石製腕飾（石釧）、管玉、鐙板、鉄鏃、その他鉄器類がある。

完壁とはいえない難いが、下野国誌に記載されたこれら遺物の記録は、再び埋没したといわれる実物を再発掘する以外に方法がない今日、古墳の营造年代とその性格を知る唯一の手がかりという外はない。本古墳も又上侍塚古墳と占地・形態・出土遺物の諸点でさしたる隔りは持っていない。規模の上で劣る下侍塚古墳も墳形の点では上侍塚古墳よりも一層前期的な姿相を伝えているといえよう。そしてたとえ石製腕飾の出土が古式古墳への廻行を導くものであるとしても、副葬品全体の遺物相から前期古墳となし得ないことは承認せられるであらう。さりとて後期にまで下す必要もなく中期に比定するのが妥当と考える。

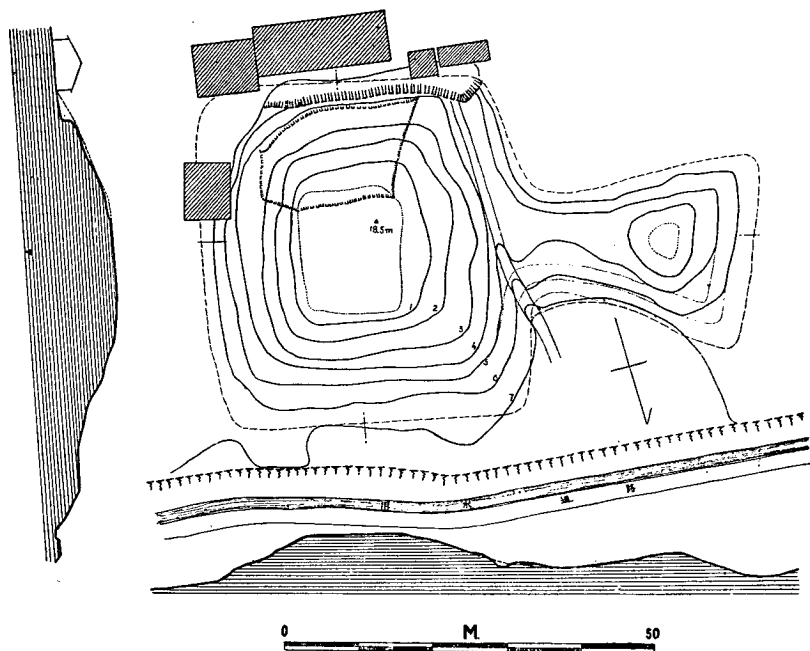
八幡塚古墳 昭和二十八年春、三木文雄氏が発掘調査を行った前期的色彩を帯びる前方後方墳である。本古墳は小川支群の代表的存在として那珂川流域西側河岸段丘上―那須郡小川町吉田に位置している。小川支群は那珂

川及び箒川の合流点の附近から南へ約四軒にわたつて約四十基が縦列構成で存在する。八幡塚古墳は古墳群の南端近くにあり、前方部を西に面している。従つて後方部は那珂川によつて形成された広い沖積地を望んでいる。

長軸長六五米、後方部幅三五米、同高さ七米、前方部の先端は人為的変改により欠失しているが、くびれ部附近の現状から推定すると幅が狭く低い前方部であつたらしい。同氏の發表ではくびれ部における後方部との比高差は三・九六米に達したという点からもうなずけるのである。内部主体は特異な粘土棺構造で、夔鳳鏡・短劍・鉄斧・ちような・鎌・槍鉞・間透・鋸・削小刀（両刃）など鉄製木工具に著しいものがある。調査の結果ではこの構造の南側に併行して粘土塊が残存していたといわれる。二棺埋葬例であらうか。

八幡塚古墳の年代についてはそれが前方後方墳であるという点もあつて種々問題の多いこととなるであらうが、三木文雄氏は外形の諸特徴及び鏡・鉞・短劍・削小刀等、鉄製工具の形式の検討から前期古墳とされるのである。

大塚古墳 八幡塚古墳の北北西約二軒、小川町より喜連川町へ通ずる県道に沿つて存在する。主丘は東西径二七米、南北二四米、高さ約六米の方形を呈し、前方部は



第6図 福島県原ノ町市桜井古墳実測図

かなり低く西面している。そして北側にある住宅のために前方部前端部が削りとられていて、その全長を確かめることは困難である。推定では四、五〇米になると思われる。

(四) 東北地方の前方後方墳

浪佐一ノ古墳、わが国最北の前方後方墳は福島県相馬郡原ノ町市上浪佐に存在する。常磐線原ノ町駅東方二軒余のこの地は、北方数百米を東流する新田川によつて形成された沖積地であるが、占地の場所が稍高いところから自然堤防上を利用したものであろう。古墳は前方部を西面させ、全長七五米、後方部幅四七米、同高さ七米余、前方部幅二七米、同高さ四・五米を示す。今、後方部墳頂に三等三角点一八・五米がある。墳丘はその南側裾が若干削りとられた以外大きい変形はなく、前方後方墳中墳丘遺存の好例である。

三、墳形の変化と年代

既に概観してきたように二四基の前方後方墳は、周濠の如き外部設備の有無を別としても規模の大小或いは墳形の変化にかなりの多様さを持っている。各々の古墳がすべて発掘調査されて、主

体構造及び副葬遺物が明瞭になつていれば形式観を容易にたてることができる。しかしこのことは望むべくもないので、前方後方墳の墳形を比較検討し、如何なる墳形の変化を辿つたかを考究し、年代観に及ぼうと思う。

出雲地方の前方後方墳は山本清氏によつて大庭二子塚古墳から出発することが明らかにされた。全長九〇米の本古墳は出雲最大のものであり、前方部の幅は後方部のそれより約五米近く狭ばまつている。また前方後円墳の形式変遷の一般的原則として承認されている前後主丘の高さの比は二・五米を示し前方部が低い。後方部は殆んど正方形に近く梯形プランの前方部が設けられている。後方部と前方部幅の差五米は第三図1の実測図では殆んど指摘し得ない程の数値である。九〇米に達する古墳の大きさから云つてまた当然のことでもあろう。後方部幅に近い前方部は、矩形プランの壇的存在から梯形プランの示威的存在への移行が認められている今日、相当に発達した形状であることを示すのである。

これに反し第三図2に示す出雲・神塚古墳は、全長六四米、後方部幅三〇米に対し前方部は三二米で僅かに前端が拡がっている。しかも前後丘の高さは等しく四米である。神塚古墳の以上に挙げた法量から帰納した古墳の形式は、前方後円墳変遷の後期形式、就中より遅れて現

われる古墳形式と一脈相通ずる特徴を備えている。後方部と等しいまでに発達した前方部を、主丘に接続させることは、前方後円墳の場合に経験するような、後円部から内彎して前方部へと続く、所謂くびれ部の順応した曲線を得ることはできない。前方部が発達すればする程、後方部に前方部を接続することはくびれ部において無理が生じる。前方後方墳築成上の不合理性は、墳丘基段を矩形化すること、つまりくびれ部を消滅させる手段の採用によつて克服したのではないだろうか。神塚古墳(第三図2)の墳形プランで後方部に対比して極度に発達した前方部に、その価値を与えていたであらうことは、墳丘上部において僅かながら前方後方墳の形式を踏襲していることからうかがえる。本古墳の如き不整長方形の基台上に、僅かではあるがくびれ部の形制を残した例は、その形の發展段階から云つても明らかに後出の形式であると思う。神塚古墳と殆んど規を一にした例は、最近千葉県成田市近傍で筆者が実見した。段築を有するこの舟塚古墳は後方部から前方部への墳形の流れは第一段において殆んど一直線に近い。整美な墳形を有し山林中にあるこの古墳が、後世の変形によつたものとは思えぬので、神塚古墳と同例と推定される。

出雲地方で最初のしかも最大の前方後方墳は大庭二子

塚古墳であるとする山本清氏の説は既に述べた。そして二子塚古墳と神塚古墳の両例について、形式上の差異を論じてきた。しかしこの地方の他の七基の形式はどうであるうか。古墳時代中期に比定される二子塚古墳との墳形プランの脈絡も当然考究されねばならないが、本稿では山本清氏の報文に基づいて若干の私見を述べるにとどめたい。

山本氏は「出雲国における方形墳と前方後方墳について」と題する論稿において、他の七例中六例の実測図を示された。六例の前方後方墳の中、年代を決しうる主体構造・出土遺物が明らかになつてゐる例は四例であり、中期古墳と認められるのは舟形石棺を露出する岩舟古墳及び梅原博士が調査された金崎一号墳である。後者は堅穴式石室を主体とし鏡・玉類・垂飾耳飾・須恵器が出土している。本古墳出土の須恵器は古調を帯び第一形式とされ中期後半期に属する。また岩船古墳の舟形石棺はかなり形式化した例であり、中期後半に比定されよう。

この両古墳の中、金崎一号墳の墳形は先行すると考えうる二子塚古墳のそれと形態上同じとはいふがたい。後方部に対して前方部もまた小方形墳の形をとり二個の方墳が相連接した趣を有する。御崎山古墳の墳形は二子塚古墳のそれと同じ系統にありわば前方後方墳本来の形

をとどめている。出雲地方においては前方後方墳出現の最初から、実に整つた墳形を持つたのであるが、本形式墳の発達は余り顕著に見られず、比津小丸山古墳、金崎一号墳の如く方墳に方形つくり出しを付設し、或いは二方墳の連接した形を残して前方後方墳本来の形制からは退化したプランをあらわすに至つた。従つて前方部の高さが後方部に比して極めて低い場合であつても、整美な前方後方墳——大庭二子塚古墳に先行しないであらうことは、内部主体の点からも認められる。

大庭二子塚古墳の推定復原によると整つた後方部の一边は約五五米となる。同地方において最も年代の遡る造山古墳は方形墳に二個の堅穴式石室を伴つた例であつた。主体及び出土遺物から前期古墳とされ一辺の長さは約六〇米である。出雲における前方後方墳発現に先立つ方形墳の存在は注意しなければならない。そして、二子塚古墳に見られた整つた要素が次第に影を薄め、系統的な形式変化を経ずに、それぞれ独自の形を現わすに至る。

畿内地方の例として掲げた下池山古墳と新山古墳は、奈良盆地を中央にした東西両山丘の裾に占地する。両古墳とも主体は堅穴式石室の系統に属し殊に新山古墳は多量の出土品によつて著名である。現状では、新山古墳が

稍大きく墳形プランでは若干の差異がある。後方部と前方部の幅の差は新山古墳が四米であるに反して、下池山古墳の場合は前方部の幅は後方部の二分の一以下である。五五米に対する二五米は稍々大きすぎる差である。

しかし下池山古墳前方部西側先端附近で認めた葺石の連り方から考えて、第一図のプランに変更を来すこととはないと思う。そして後方部と前方部の接続の方法は、下池山古墳が明瞭に方形にくびれるのに対し、新山古墳はゆるやかな内彎曲線を描いて前方部へ移行する。そのため全体として新山古墳の後方部の方形化がはつきりしないうらみがある。後方部と前方部の高さの比は、下池山古墳が四米を示し新山古墳の二倍である。このため立面図に認められる墳形は著しく異なる。

新山古墳の年代はその出土遺物から五世紀に降すべきものであるが、下池山古墳の年代をはつきり断定することはできない。しかし今迄に検討してきた墳形各所の差異からは、新山古墳より古式な古墳とする見解に到達するのである。現在筆者が知り得た資料からは、先行形態という認識とそして恐らく前期終末期に比定しうる推測を抱くにとどまるのみである。そして出雲・大庭二子塚古墳の場合をも考えるならば、下池山古墳の先行を形態上主張しうるとしても、この三古墳は殆んど相前後した

時期に営まれたものであり、前期後半乃至中期前半に年代をおくのが最も妥当なことと思われる。

畿内地方及び出雲地方の前方後方墳の墳形プランに基づく形式変化は下池山古墳↓新山古墳・二子塚古墳の順列を主張できるのであろうが、その他の地域、即ち東日本各地の例ではどうであらうか。

群馬県八幡山古墳は全長一三・二米の規模を有するが、後方部幅七・三米に対し前方部幅は六・五米で八米の差を有する。この差はその全長に比し決して大きいものではなく、墳形プランとして前方部は後方部の発達とはほぼ同程度の段階にまで進んでいる。前後両丘の高さの比は、前方部が四米低く未だ盛期のそれに及ばない。本古墳は學術調査を経ずして出土品が齎らされたものであるが、横穴式石室とする風説も一応はきくべきであらう。若し横穴式石室が事実であるならば、横穴式石室を主体とする前方後円墳との関連を考え、更にこの構造形式が一般的である方墳に、前方部が付設されている点から、前方部の稍未発達なことは本古墳の築造年代を推測する消極的な徴証にしうると思う。そしてまた、朝倉古墳群が形成されたその期間の中で、本古墳の築造が最大の規模を有したものであつたことは、少くともこの地の支配豪族が基本的な生産力を基盤とした成長に、著しいものがあつた

ことを示しているに外ならない。支配層的内容的な充実が、彼等の奥津城である古墳の規模に多少なりとも関連を有すると思われるから、東日本殊に群馬県における八幡山古墳が、その包含される古墳群の中で最大のものであるとする認定は極めて重要な問題を持つのである。八幡山古墳の墳形の発達楕円と、推測の域に止まるが横穴式石室の主体とは後期古墳―後期前半という年代を与えさせる。

畿内地方においては、墳丘の巨大化へ五世紀前半期に到達したが、八幡山古墳例を初めとして東日本各地では、若干遅れて到達したらしい。古代国家の支配権力のエネルギーは種々変形した形において、或いは緩急の速度をもつて燃焼されるが、その本質はなおわれわれの課題というべきであろう。

栃木県小川・湯津上古墳群の場合では四基の前方後方墳は小川支群・湯津上支群の二つのグループに分れて二基宛存在する。

小川支群の八幡塚古墳は調査の結果から古墳群中最古の古墳と断じてよいし、三木文雄氏は関東地方においても神奈川県加瀬山古墳に匹敵する年代の古さを与えている。^{註22} 事実、後漢代に比定しうる夔鳳鏡を初めとして、バラエティに富む鉄製工具類の出土は前期古墳の様相を持

っている。

八幡塚古墳の墳形は群馬県八幡山古墳・島根県大庭二子塚古墳とは稍々異なり、後方部の存在に対して前方部のあり方は極めて未発達の段階にある。即ち三木氏の推定によれば、後方部径三五米に対して前方部中間で一二米を測り、「後方に比して著しく低く狭い前方部」になる。同様のことは同じ支群中の大塚古墳に対してもいえるが、この二古墳が持つ形態上の特徴は、湯津上支群の上・下侍塚古墳の先行形として把握できるものである。

上侍塚古墳は第五図に示す如く前方部は後方部に対比してその発達が盛期の段階にある。即ち前後両丘の幅は殆んど等しく、高さは前方部が四米低い。しかし全長が優に百米を超える点で、さほど顕著な差に認められぬが墳形変化の過程としては注意する必要がある。下侍塚古墳は全長七六米を算するが前後両丘の幅は、前方部が約一一米狭く、また高さでは前方部が約四米低い。上・下侍塚古墳の墳形を比較すると、明らかに後者が未発達の形状を呈し、古式古墳の姿相を伝えている。従つて湯津上支群においては下侍塚古墳―上侍塚古墳という年代順が一応認められるであろう。両古墳の内部構造は不明であるが、出土遺物から推して中期古墳と思われ、下侍塚古墳からは径六纏高さ二纏の石製腕飾が出土している点

が注意される。

小川・湯津上古墳群には方墳が存在しており当然前方後方墳との関連を検討しなければならないだろう。しかしこゝでは、この古墳群においても前方後方墳の墳形が、後方部の系統的発展に加えて、前方部の付設のしかたとその形状変化がまさしく前方後円墳のそれと相表裏している点を指摘するにとどめよう。

東日本の他の例では既に學術調査が行なわれた茨城県丸山古墳を挙げるのが適切であろう。標高五〇米未満の丘陵上に占地する本古墳は埴輪・葦石などの外部設備を欠くが、内部主体と出土遺物相は前期的な残滓を強く残している。しかし遺物の内容には畿内地方或いはその周辺の諸地域において認められる前期古墳の遺物のあるものを欠いており、相對年代は中期初頭に降すべきであろう。この丸山古墳は全長五六米、後方部幅三〇米に對し前方部幅は一六・七米という極めて前方部の狭い形を呈している。前・後方部の高さは二米の差を有し、後方部の内部主体直下は前方部のレベルと同一である。前方後方墳の發展過程において丸山古墳は朽木県八幡塚古墳に相近い。その上、図らずも両古墳の内部構造が特異な粘土構造であつた点はお一層の興味を抱かせるのである。

東日本各地の前方後方墳中、年代が遡る古墳は八幡塚古墳と丸山古墳であり、稍遅れて下・上侍塚古墳が継起する。これらは恐らく古墳時代前期後半に始まり中期に及ぶものと考えられる。そして群馬県朝倉古墳群、或いは朽木県小川・湯津上古墳群において、今迄に例証した各前方後方墳は古墳群の中核的存在であつた。これらは唯單に中心的な、また代表的な古墳であつたばかりでなく、規模においても古墳群の盟主と仰がれる大きさを持つていた。墳丘規模の拡大化が、單なる支配者の好みや、築造労働者の稀に見る労働意識の高さによつたとは考え難い。たとえ古墳の規模が大和政権の成立した畿内地方のそれに及ばなかつたとしても、かなり遅れて大和朝廷の権力機構に組み入れられた東国の古墳としては、辺境の支配階級の盛衰を物語る表示として注目されなければならぬ。東日本の古墳の巨大化―巨大化といつても政治的・經濟的に立脚した基盤が質的に異つていたであらうから、応神・仁徳陵とは比較すべくもない―が五世紀中葉以後つまり古墳時代中期後半或いは後期初頭に現われることは、前方後方墳の場合に限らず王者の墓制である前方後円墳についてもまた認められるところである。

墳形規模の拡大に触れたところで、わが国最北の前方

後方墳Ⅱ福島県原ノ町渋谷古墳（旧称桜井古墳・古墳群の構成に稍異なる点があるので、渋谷支群と桜井支群とに分離しようと思う）を検討しよう。

渋谷古墳は全長七五米、後方部幅四七米、同高さ七米、前方部幅二七米、同高さ四・五米を有する前方後方墳である。前方部は西面し墳丘東側裾が住宅の建築により僅かに削られている。墳丘の遺存状況は良好な部に属すと思われ、葦石・埴輪円筒列の存在は認められない。また周濠は南側に存したことが明瞭である。

本古墳は現在二四基からなる渋谷支群の中心的古墳で、古墳群中には方墳が存在する。全長七五米という規模は、筆者の知り得る範囲では福島県下最大の古墳である。実測調査の結果から、先ず後方部と前方部幅の差が著しい点を挙げることができる。両者の差は二〇米を算するが、くびれ部ではこの差はなお一層ひらき三二米に達している。従つて後方部から前方部への移行には、見事な方形化を呈する。たびたび指摘してきた如く本古墳においても、後方部が主丘としての形制を維持していることは、八幡山古墳・侍塚古墳・二子塚古墳などと同様である。墳丘形式では前後両丘の高さの比二・五米とともに古式の前方後方墳としてよいと思う。感性的な観察かも知れないが、前方部はその前端部において南北方向

にひらいているため、プラン全体が稍と形式的整美さに走る趣がある。確かに墳形の上では古式な前方後方墳としてよいであろうが、築造年代は地域的な考慮を加えれば中期後半とすべきであろうか。内部主体は未調査であるが、粘土棺の可能性が十分にある。渋谷古墳の場合、古式の墳形を伝え、しかも古墳群の主導的古墳として存在するところに、問題を蔵し、それが福島県下第一の規模であつて見れば、東北地方へ波及した古墳文化の年代とその内容の一端をも論証しうることになるのではなからうか。

前方後方墳の墳形は主丘たる後方部に前方部が付設した形状を呈するものであることは本稿の初めに述べた。そして各地の前方後方墳を検討した結果からは、前方後方墳がその最初から極めて整つた後方部を持ち、それに前方部が付属したものであつたということが出来る。前方部と後方部の統一的な規定性は、勿論後方部が維持しており、前方部の変化が前方後円墳のそれと密接な関連を有することは、前方後方墳の形式が前方後円墳同様に推移したことを裏書するものである。本稿で取扱つた前方後方墳の形式は少なくとも三期の段階を進んだと思われる。即ち栃木県八幡塚古墳、茨城県丸山古墳が示す前方部の未発達な墳形をその最初の形式とし、更に低く狭

い前方部が梯形プランへと發展した出雲二子塚古墳例などが第二の形式と云えるであらう。この第二の形式が前方後方墳の最も發達した段階にあり、墳丘規模も大きい飛躍を遂げた時期にあたる。墳形の發達も後方部と前方部の幅が等しく、前後両丘の高低比は狭ばまるか若しくは等しくなる。第三形式は島根・神塚古墳若しくは千葉・舟塚古墳の如く、墳丘全体が長方形プランとなりくびれ部の造構は退化し、僅かに形骸をとどめるに至る。しかし地方的には系統的な發展をする墳丘形式の分化が認められ、前方部の縮小化による古式な形式をさえ生むに至つた。

三形式の一般的变化を辿つた前方後方墳の發現は、古墳時代前期後半に認められ、地方的には中期初頭まで下る。第二形式の前方後方墳は中期中葉以後後期前半に比定され、第三形式は其後に続くものと考えられる。こうした継起を辿る前方後方墳の墳形変化は、前方後円墳の推移と同様であるが、この特殊な形態は前方後円墳の一変形として出發し、そして終つたものであらうか。この疑問に答えるためにはなお少し前方後方墳の性格を考える必要があらう。

四、前方後方墳の發生と性格

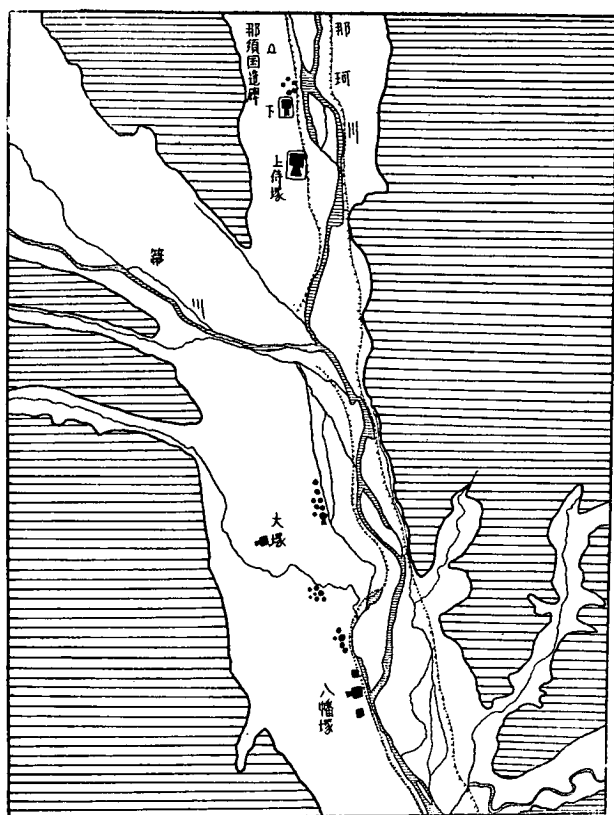
前方後方墳の系列的な發展が存立した外に、前方後円墳の發生と推移は、より古くから続いていた。それ故に従来は前方後円墳から派生した一変形墳として把握するのが一般的な考え方であつた。しかるに古式な前方後方墳ほど主丘が定形化した方形であることは、この考え方が妥当なものでないことを示している。従つて前方後方墳が如何なる要因によつて出現し、またこの古墳形式がわが支配層の墳墓としてどのような形で受入れられていつたかを考究することにより、前方後方墳が示す特性と出發のモメントを知ることができると思う。

前方後方墳の出現に関する最も中心的な課題は、その特異な墳形が何に基づいたかということである。島根県出雲地方では前方後方墳と同数の前方後円墳が存在するが、發生の直接的な要因としては關係がなさそうである。同地方の最も古い古墳は造山古墳であり、恐らく前期後半に比定しうるものである。そして同古墳が方形墳である点に大きな関心が寄せられる。主丘を円形から方形へ転化させるといふことは、單なる築造者の気まぐれであつたとはいふ難い。前方後方墳の主丘が明らかに方形化の意識の中に生成したものであつたことは、後方部

築造の實際から帰納される。そうした事實は造山古墳と大庭二子塚古墳の結び付きの理解により裏付けられるし、實際、造山古墳に始る三十二基の方墳の連続は前方後方墳発生と存続の基盤となつたと思われる。従つて同地方の古墳文化は前方後方墳と方墳によつて、特色あるものとなつてゐる。出雲においては前方後方墳が出現しても方墳は失なわれなかつた。方墳の存続してゆく基盤の中から前方後方墳も出現した。確かに「出雲の古墳文化は畿内の系統を受けたもの」であつたし、古墳の出現は同地方が新しい階級支配の体制に変質したことを物語つてゐる。そしてその最初から方墳が採用され次いで前方後方墳を生成せしめ、以後両形式は前方後円墳とともに存続しつゝ没落の過程に至つてゐるとすれば、特色ある古墳文化と云えるし、また出雲の主体性を強く押出した性格を持つてゐると云わねばならない。出雲地方に君臨した支配者が先ず採用した墳墓形式は方墳であり、主体は二個の狭長な堅穴式石室であつた。内部構造の形制が畿内地方諸豪族の採用していたそれと殆んど規を一にしており、また副葬品の上からも何等他の要素を認め得ないことは、畿内文化の強い影響によつて發現したと云つても誤りはないだらう。しかし、方墳を以後長く存続させてゐることは、出雲的な特色ともいえる

し、伝統を受継ぐ共同体的殘影が強く尾を引いてゐるからではあるまいか。それ故にこそ、大和政権の伸長に伴う前方後円墳の築造に關連して、方墳に前方部を付設するに至つたのであらう。しかもその前方部が、最も発達した形であつたことは、畿内における中期古墳の前方部の形式を踏襲したことを示すのである。このことは出雲の前方後方墳が五世紀の中葉頃に出現したとする考えと矛盾しない。

出雲地方では方墳が先ず現れ、其後に方墳を母胎として前方後方墳が生まれた。栃木県の小川・湯津上古墳群（第七図）では前期後半に小川支群の八幡塚古墳が出現する。そして八幡塚古墳を主体として三基の方墳を含む八基の古墳が存在している。また北方には大塚古墳と前方後円墳を含む小古墳の一群がある。小川支群の中では八幡塚古墳が最も古く、三基の方墳はそれに続くものと思われる。南端の方墳は一边を略南北に向け約二七米、高さ四・五米を算する。墳丘には八幡塚古墳同様葎石がある。これら三基の方墳の年代を決めることは困難なことであるが、古墳群構成中の位置と墳丘觀察から中期に比定してよいと思う。若しこの年代が承認されるならば、小川支群では前方後方墳の出現後、間もなく方墳があらわれることになる。出雲地方の場合は丁度これと逆



第七図 栃木県小川湯津上古墳群分布図

らわすのである。小川・湯津上古墳群には二基の前方後円墳が認められるが、古墳群形成の主導的古墳にはならず、方墳と前方後方墳にその道を譲っている。やがて墳墓地域は小川方面から湯津上村へと移る。そして両侍塚古墳の築造期に縮くのである。八幡塚古墳の古さは恐らく出雲・造山方墳に匹敵するものである。従って出雲と下野の両地域において相前後して方墳と前方後方墳が出現したといえる。関東地方の前方後方墳の発生は前期後半と考えられるから、同地方の古墳築造が開始されて間もない頃であつたろう。小川・湯津上地域では最初に出現した前方後方墳及び方墳の形式をながく温存し、発展させているが、茨城県の柿岡古墳群と沖州古墳群においては断絶の状態を呈する。

の様相であつたが、前方後方墳は主体である後方部の方形化にこそ重大な意義を持っていたのであつて、方墳に前方部を設けた形が先行することもまた当然のことといわねばならない。そして相前後して方墳が築かれたことも、前方後方墳の出現とともに、小川支群の特異性をあ

柿岡古墳群は七基の前方後円墳と一基の前方後方墳を含む約四十基から成る。この古墳群形成の最初は西暦五世紀初頭とされ、前方後方墳・丸山古墳をもつて始ま

る。丸山古墳の副葬品は前期的色彩を持ち、また墳丘には葺石・埴輪円筒列を欠いている。本古墳群では次の段階に至つて円筒列の出現を見るが、それらの有無が如何なる事情によるのか俄に決し難い。ともあれこのような要素を持つて出現した前方後方墳は、その残影を残さなかつた。同様のことは茨城県行方郡の霞ヶ浦沿岸に所在する沖州古墳にも云える。未だ精査を行つていないが墳形の概観からは前期形式と云つてよいであらう。古墳時代前期後半は、墳形も形式的統一化の直前であり帆立貝形古墳・つくり出しの付設・陪塚の成立など種々変異を見せる時である。この時期に前方後方墳をつくり出したことは、より古くから存在した既成の古墳形式の枠に制約されずに、新形式を採用し得た基盤があつたからにちがいない。方墳と共存せずに孤立的に存在する前方後方墳は、方墳が存在しないという理由から出現過程を別に考えることは難かしい。それらの多くが方墳に低く狭い前方部を造り出した形状である点で、やはり方墳に出自をおくものであらう。そして一古墳群が前方後方墳を以つて出発しても、以後その存在を見なくなる場合があるのは、前方後方墳或いは方墳を受入れ、そして伝統化する地域的特性に基づくものであらう。

主体の方形化を積極的に採用し得たことは、伝統を強

くあらわす墓制の上では容易なことではなかつた筈である。それにも拘らず出雲・東日本各地の支配者が方形化の意識を強くあらわした点は、そうすることの必然性があつたからではなからうか。

出雲地方及び東日本で相前後して出現した前方後方墳は畿内地方でも殆んど時を同じくして現われる。下池山古墳は柳本古墳群に北接する朝和古墳群に十数基の前方後円墳と共に存在する唯一基の異形墳である。新山古墳は馬見古墳群の中では、その形成初期に築かれた古墳である。おびただしい副葬品の中には僅かに古い姿相を残すが、大陸文化との接触を物語る遺物を初め、中期的な色彩が濃い。

朝和古墳群・馬見古墳群は前期—中期に形成されたが、それぞれに一基宛孤立的に前方後方墳を存在させている点は、既述の出雲若しくは東日本の場合とは著しく異なつてゐる。しかし茨城県下の二例とは同じ条件である。更に、福島県の場合は那須・小川支群と同様のケースと云えよう。群馬県朝倉古墳群における八幡山古墳は、後期に入つてから大規模な整然たる墳丘を現出するが、その先行を示すような要素は同古墳群には認め難い。そしてより以後において前橋市総社附近における方墳が特色あるものとなる。

以上各地の前方後方墳が古墳群において、どのような位置を示しつゝ出現したか概観したが、畿内地方、出雲地方及び栃木・茨城県では四世紀後半乃至五世紀初頭に相前後して発生している。それは出雲を初め東日本各地においても畿内の古墳文化の十分な受容を物語る内容を示していた。しかし方墳と方墳から出発したであろう前方後方墳の墳形は、極めて短期間に各地方で発現している。そしてその推移は孤立的に消滅してしまう場合もあり、また成層的に發展するものもあつた。中には群馬県八幡山古墳のように、古墳群形成中、後期前半に突発的に出現した例もあるが、前方後円墳發達の段階に従つた、前方部形式を採用している。前方後方墳が各地で相前後して発生することは、各地方にこの墳形を生み出す基盤と条件が十分に満たされていたからにちがいない。墳墓を方形にする意図が内的若しくは外的いづれの要因に基づいたものであつたにせよ、なお後代迄主体性を確立しようとした出雲地方において或いは当代の辺境であつた東国地方において著しい存在を示す点は注意しなければならぬ。畿内地方の前方後方墳二基は、中期初頭までに消滅するが一部には方墳が陪塚として認められる。そして前方後方墳が古墳群の中で連続して主導的古墳となることは全くなかつた。従つて畿内地方においては前方

後方墳が存続していく条件が欠けていたともいえるし、僅かに陪塚として認められる方墳は、横穴式石室の採用以後に新しい構想の下に出発することになつたのである。

分布と發展の實際から云うならば、前方後方墳は畿内を中心とする古墳文化の消長と併行し、影響をうけながらも、方墳と結びついた独特な性格を表現していると云うべきであろう。

五 あとがき

前方後方墳は主体の方形化に関連して方墳から出発したものであらうとした。方墳發生の問題は前方後方墳研究の主題といつてもよいだらう。しかし本稿では方墳の發生に就いては殆んど触れなかつた。類例が増加し種々新しい事實に接する都度、問題は一層の複雑さを加えていくばかりである。前方後円墳の主体部上部に発見される方形埴輪列と、その内側が塚状に盛り上げられている例―たとえば三重・石山古墳、奈良・茶臼山古墳、日葉酢媛陵など―を方墳發生の母胎とすることにはなお疑義がある。この点については下津谷達男氏が論じているように、事物をたてならべ、特定の祭りのために設置された方形埴輪円筒列と内部の凸出部には、本来的に意

義が与えられていて、遺骸を葬る主体Ⅱ方墳とは意味の異なるものであつた。この事実は古式な方墳を検討することから裏付けられるが、紙数の都合から別に論じたい。最後に筆者は方墳の出現を、外的要因に求め当時のわが古代国家の歴史的立場から捉えようとすることを記してこの小論を終りたいと思う。

本研究にあつては後藤守一教授・杉原莊介教授から種々御指導と御援助をうけたことを記して感謝とした。また研究は基礎的な墳形測量を主体とした関係から各地の諸先生、学友の御援助をうける点が大きかつた。

特に末永雅雄博士をはじめ斎藤忠技官・尾崎喜左雄教授・相沢忠洋氏・山本清助教・西川 宏氏・江森正義氏・大内重春氏・相馬高校郷土研究部諸君からも御教示と御援助をうけた。こゝに深く感謝する次第である。また、実測に協力された李進熙君を初めとする明治大学文学部考古学講座学生諸君にも篤く感謝したい。

（本研究は昭和二十九年・三十年代文部省科学研究費助成研究補助金による研究の一部である）

註1 浜田耕作「大和島庄石舞台の巨石古墳」（京都帝国大学

考古学研究報告十四）

2 山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」

（島根大学論集・昭和二十六年）

3 山本清「遺跡の示す古代出雲の様相」（出雲国風土記の

研究・昭和二十八年）

4 渡辺竜瑞「那須国造碑発見と侍塚の発掘」（あんころばす一〇）

5 佐藤錠太郎「前方後方型古墳の発見」（上毛及上毛人一・二号・大正一五年）

6 大塚初重「常陸丸山古墳の墳形と内部構造について」（日本考古学協会十二回総会研究発表要旨・昭和二十八年）

7 三木文雄「古墳出土の鋸について」（考古学雑誌四〇巻一・号・昭和二十九年）

8 梅原末治「佐味田新山古墳研究」大正十年

9 末永雅雄「大和の古墳」昭和二十五年

10 昭和二十七年各研究および助成研究報告集録（昭和二十八年）

11 上田三平「西山古墳」（文部省史蹟調査報告一）

12 昭和三〇年、三昧塚古墳発掘の際に実見した。

13 註一〇参照

14 梅原末治「佐味田新山古墳研究」大正十年

15 後藤守一「私たちの考古学・古墳時代篇」昭和二十二年

16 天神山古墳も前方後方墳の疑いがあるとされてきたが、

尾崎教授の御教示により前方後円墳であることが判明した

17 尾崎喜左雄「古墳のはなし」昭和二十七年

18 支群という分類の概念と名称は、後藤教授が提唱された

19 河野守弘「下野国誌」十二巻

20 三木文雄「栃木県八幡塚古墳について」日本考古学会例

会発表昭和二十八年

21 22 註20参照

前方後方墳一覽表

	古墳名	前方部 方向	全長 M	巾		高		占 地	墳輪	墓石	周濠	内部構造	遺 物
				後方部	前方部	後方部	前方部						
1	奈良・新山古墳	S	127	64	60	10	8	丘陵端	○		○	竪穴式石室	鏡石、製腕、飾帶金具
2	奈良・下池山古墳	S	115	55	25	11	6	山麓		○	○	竪穴式石室?	勾玉朱?
3	奈良・新沢古墳												(末永博士調査)
4	島根・二子塚古墳	W	71 (90)	54.5	50	9	6.5	低合地上	○		○		
5	〃・御崎山古墳	W	38	22	14	3	2	合地上				横穴式石室	石棺、鉄鏃、須恵器、劍、鈴
6	〃・古天神古墳	SW	26	16	14	3.5	3.5	丘上	○			横穴式石室	刀身、鏡、須恵器、雲珠
7	〃・岩舟古墳	N	50	28	26	5	4	丘上	○			舟形石棺	?
8	〃・中竹矢古墳	W	20	16	6	3	1	丘上					
9	〃・乃木二子塚古墳		40	27	14	4	2	山麓					須恵器片
10	〃・金崎一号古墳	NW	36	28	26	5	2.5	丘上	○			竪穴式石室	鏡、玉類、耳飾、須恵器
11	〃・比津小丸山古墳	W	26	19	6	3	1	合地上					
12	〃・神塚古墳	W	64	30?	32	4	4	丘上	○				
13	石川・亀塚古墳	WSW	61	41 35	24	8	4	丘陵端					
14	静岡・小銚子塚古墳	W	47	36	24	7	3	合地上					
15	群馬・八幡山古墳	SSE	132	73	65	12	8	低合地上		○		横穴式石室?	直刀
16	茨城・丸山古墳	S	56	30	17	7	4	合地上				粘土棺	鏡玉、劍、銅鏃、直刀
17	茨城・沖州古墳	S	70	30				丘陵上					
18	栃木・上侍塚古墳	S	112.6	52.3	51.2	11.5	7.2	段丘上	○	○	○	粘土棺?	鏡直刀、刀子、鏃
19	〃・下侍塚古墳	S	76	46.2	35.7	9.5	5.7	段丘上			○	〃?	鏡、石製腕飾、管玉
20	〃・八幡塚古墳	W	65	35		7	3	段丘上		○	○	粘土棺?	鏡、鉄製工具
21	〃・大塚古墳	W	50?	27 24		6		平地					
22	千葉・舟塚古墳	NW	70	35	35	7	7	合地上			○		
23	福島・没佐古墳	W	75	47	27	7	4.5	平地			○	粘土棺?	
24	奈良・西山古墳	W	180	94.5	72	14	8.4	低合地上	○	○	○	竪穴式石室	鏡、石製鏃